日本臨床発達心理士会神奈川支部

NEWS LETTER かながわ

2009 年度第 1 号(通巻第 5 号)
2009 年 7 月 20 日　神奈川支部　発行
連絡先 e-mail: jacdp-kanagawa@hotmail.co.jp

巻 頭 言

神奈川支部長　関戸 英紀

“うちの子はオシッコが青くない？！”

５月の連休後に、ある小学校の校長と話をしていた時のことです。今朝、学校に、保護者から、「今日は、子どもに、半袖と長袖のどちらを着せて登校させればよいでしょうか」という電話がかかってきた、という話がありました。子どもならいざ知らず、保護者なのだから、それくらいは自分で判断できるだろう…、と私が驚いていると、校長は、これくらいは驚くに足りない、よくある話だ、と言って、次のような話をしてくれました。

乳幼児健診で、保健師が、若い母親から、「うちの子どもは、オシッコが青くないのですが、大丈夫ですか？」という質問を受けたそうです。保健師が、「お母さんのオシッコは青いのですか？」と聞くと、「いいえ」と答えたということです。私は一瞬、この話を理解できませんでした。しかし、“青いオシッコ”で、すぐに、くだんの紙おむつのコマーシャルを思い出しました。

なぜ、このような質問が出されるのでしょうか？コマーシャル・メッセージの悪影響である、少子化のため母親自身が弟妹や兄姉の子どもとかかわった経験がないからである、核家族化のため母親の身近になんでも相談できる人がいないからであるなどなど、きっと様々な立場から説明がなされうるでしょう。

一方で、モンスター・ペアレントのことが、時々、マスコミで取り上げられます。このことは、メンタルなことが理由で、療養休暇をとらざるを得ない教員が増えていることとも無関係ではないでしょう。別の校長は、春の運動会の昼食後、校庭の桜の木陰で、高いびきの父親が何人もいてとても困った、という話をしてくれました。

私がここで紹介するまでもなく、学校では、児童生徒ばかりでなく、保護者も多様化してきています。今後は、児童生徒への支援と同時に、保護者に対する支援もよりいっそう必要になってくると思われます。また、今年度から教員免許状の更新制が新たに始まります。教員にはますます“縛り”がかけられます。この混沌とした学校に、“発達支援”の専門家として、私はどのような貢献ができるのだろうか、と自問自答しながら、今日も学校の門をくぐります。

神奈川支部研修会報告

テーマ：発達障害者の抱える課題と支援の実際－横浜市障害者支援センターの実践から－
日時：2009 年 5 月 30 日（土）13：30～16：30
場所：横浜市青少年交流センター
講師：関水　実　氏（横浜市発達障害者支援センター　センター長）

今年度の研修の年間テーマは「生涯発達支援　発達障害のある本人への継続的な支援」です。第 1 回目の研修会では、横浜市で 18 歳以上の発達障害者を対象に二次的な相談機能の役割を持ち、コンサルテーションを行う発達障害者支援センターの実践について、センター長である関水氏にお話を伺いました。

成人期の相談を担っている発達障害者支援センターで、近年多いのが高機能自閉症・アスペルガー症候群の社会的不適応の相談です。いくら知的に高くても、その対応の基本になるのは構造化・視覚化など自閉症としてのものと同じです。講演の中では、知的障害を伴う自閉症の障害特性に配慮した対応を理屈でなく血肉化することが、高機能の人たちへの対応をも可能にする、ということが強調されました。その一方で、高機能だからこそ直面する様々な問題にも触れられました。問題が家庭では目立たず勉強についていけるために、保護者にとっても障害を認知しづらく、学校教育の中でも個別的な支援を受ける経験を積まずに来てしまいがちです。その結果、種々の精神症状・行動障害を合併し、「重ね着症候群」と言われる状態像になるケースもあります。迫害感・被害感が強くなっているため、周囲が本人のできることを意図的に認め続けて自己肯定感を育てることが重要です。高機能の中でも、境界域知能で療育手帳を活用できる「低・高機能群」、精神保険の手帳を活用できる「中・高機能群」、従来の社会援助サービスの対象になりにくい「高・高機能群」、と知的レベルの違いに配慮した援助が実際には必要となります。学力が高くても対人社会性の問題が大きく、一方的な思い込みが強いケースは、就労などの支援も難しいそうです。実際に経験された様々なケースを紹介していただくことで、聞いている私たちにもその困難さがひしひしと伝わってきました。質疑では様々な現場の悩みに対し、丁寧に答えていただきました。

神奈川県支部研修会についてのアンケート結果

参加者 53 人中 35 通(66%)を回収させて頂きました。

１．今回の研修会の内容について

1)「自分の知識の広がりにつながるものでしたか。」(5択)

35 人中、「とてもそう思う」が 20 人、「そう思う」が 13 人、「どちらでもない」が 1 人でした。(無記入1)

２)「臨床現場に役立つものでしたか。」(５択)

35 人中、「とてもそう思う」が 16 人、「そう思う」が 15 人、「どちらでもない」が 3 人でした。(無記入1)

３) 内容へのご意見をお聞かせ下さい。(自由記述)

- 話と資料が一致しているともう少し聞きやすかった。(4)
- 具体例がたくさん伺えてとても興味深く参考になった。(5)
- 大変興味深い、中身の濃いお話だった。(4)
- HF と LF の相互性の重要度で再確認することができた。(2)
- アルペルガーの人の就職について成功しやすい職種の傾向があれば知りたい。(1)
- 18 歳から 65 歳の知的・精神・自閉の方々との生活の中で今日の研修は刺激となった(1)
- 成人の自閉症についての講習会は初めて受講したので有意義であった。(1)
- 「一生涯のこと」というのが心にひびきました。(2)
- もっと話が聞きたいと思った。(2)
- 今かかわっている生徒の指導への方向性を見いだすことができました。(1)
- センターの業務がわかり大変勉強になった。(1)
- 担当しているアスペルガーの児童の将来像を思い浮かべると不安になった(1)
- 「教師は治そうとする」という言葉を痛感した。(1)

２．今後の神奈川県支部で希望する研修会・研究会について（自由記述）

- 不登校の要因とその対応について。
- 神奈川県の特例子会社の実態と就労状況。
- 精神障害者関係。(成人、児童など)
- 職場にいる成人のアスペルガーや自閉症の方との対応の仕方。
- 親の立場から考える発達障害。
- 事例検討。
- 関水先生の話の第 2 弾(2)。
- 子どもたちの心の病気。
- 保護者支援。
- 青年期以降の一般発達について。
- 小・中・高の発達支援の現状。
- いろいろな地域の療育システム。
- 保育園における発達障害児への支援。
- 研修場所を施設見学と同時にできるとよいのでは。
- 2次障害から派生した精神疾患への支援。
- 心理検査の施行から解釈まで。
- 学校現場における HFD の対応の仕方

３．その他研修会について気づいた点（自由記述）

- 会場の大きさとpptの画面の大きさがあってなかった。
- 抽象的な内容ではなく具体的な内容で今回の企画はよかった。など。